

札幌新まちづくり計画市民会議
文化・人づくり分科会第3回会議概要録

日 時 平成16年1月8日(木) 18:00~20:30

場 所 札幌市民会館 3階 第6会議室

出席者 臼井 博 分科会会長

阿部一司 委員 ・飯塚優子 委員 ・大沼義彦 委員 ・杉森洋子 委員

高田悦子 委員(経済・雇用)

中島 洋 委員(環境・都市機能)

次 第

1 開 会

2 議 事

(1) 前回までのまとめ

(2) 事務局説明(施策の基本方針)

(3) 意見交換(施策の基本方針など)

(4) 議論のまとめと全体会議への報告内容の確認

3 閉 会

議事の概要

始めに事務局から前回までのまとめについて、資料1「前回までの会議における議論のキーワード整理」に基づいた説明があった。

事務局より資料2「施策の基本方針」についての説明の後、委員からの提案メモの説明があり、休憩をはさんで活発な意見交換が行われた。

全体会議への報告についての確認を行った後、閉会となった。

意見交換の概要

委員提案メモの趣旨説明

白井会長

<重点戦略課題「自立した市民に育てる教育の推進」について>

- ・ 子供の学力低下についての議論が難しいのは具体的な実態把握が弱いから。基礎学力、学習意欲、日常生活、生活時間などについての基礎的な現状調査・研究が必要ではないか。
- ・ 「教育環境の整備」ということでは人の環境整備も重要ではないか。個別指導や総合学習などに地域の人材を活用できるシステムづくり、コーディネータを含めた人的な環境整備が考えられないか。
- ・ 日本語未修得者に対する、アメリカの第2言語としての英語（ESL）のような制度が札幌だけでなく日本にはあまりない。また、通訳など支援システムの整備も必要。

<重点戦略課題「さっぽろを支え、発信する人づくり」について>

- ・ 「市民の身近な場所での学習機会の充実」は、一般的には個人の生きがい向上のためと位置付けられているが、学習スキル獲得は雇用機会の増大につながる経済・雇用の問題でもある。
- ・ 夜間利用のほかに図書館のサービス拡大への対応を考える必要がある。
- ・ 図書館でのマルチメディア利用が増加してきているが、マルチメディア機器の操作方法を学ぶ場としての活用も必要ではないか。地域のボランティアをそういった研修に活用することも考えられる。
- ・ サークル活動の場としての図書館利用、司書サービスのボランティア育成の場としての利用も考えられる。
- ・ 小学校統合の際に廃校となる小学校を地域の文化活動の場として再利用することはできないか。管理・運営をどうするのかについては、他都市の成功事例などが参考になるのではないか。
- ・ 新設が検討されている市立大学では専門教育と教養教育のバランスが大事。それは、大学の専門分野となる医学、芸術に人の営み一般についての知識、理解が必要だから。
- ・ 地域の大学との連携に関しては、単位の相互互換の拡充を。
- ・ 地域との連携に関しては、生涯学習のためのプログラム提供に加えて、札幌市の職員の研修、札幌市の諸施設や機関との研究連携についても考慮すべきではないか。例えば高校との連携としては、大学の単位の先取り、進路面での大学の施設、スタッフの利用が考えられる。

大沼委員

- ・ 社会人となり新しくスポーツを始めたい人は公共施設がなかなかとれない。新しい人とこれまで利用している人たちの両方が施設を利用できるシステムがつかれないか。
- ・ どの区にどういう運動施設があるのか、また、スポーツに関する相談窓口がどこなのかを明示する。
- ・ 総合型地域スポーツクラブは、現在札幌市にある体育振興会の現状と課題を押さえた上でスタートしてほしい。
- ・ パイロット事業として、市街地にいつでも遊べるような思い切ったクラブをつくることも考えるべきではないか。
- ・ 区の体育館で職員がクラブ活動の支援や紹介をしてはどうか。いつでもアクセスできるクラブ検索システム構築も考えられる。
- ・ 総合型地域スポーツクラブは多種目、多世代、多様ということがあがるが、まずは単一種

目のいくつかのクラブがまとまる形でつくればいいのではないが。指導者養成には専門家の支援が重要になるので体育協会と連携したほうがいい。

- ・ 2つのプロスポーツクラブを札幌に根ざしたものにしていけることが必要。例えば「コンサドーレの日」や「ファイターズの日」というような、ファン感謝デーとは違うものを設けてはどうか。また、札幌市はコンサドーレに出資しているが「出資の利子」として市のイベントに選手を呼んでもいいのではないか。
- ・ トップスポーツと地域のスポーツの間の「つなぎ」を考えないと、両方中途半端になってしまう。
- ・ NPOという「プロ集団」が活躍する場をつくる必要がある。「札幌NPOファンド」のような場や機会を新しく立ち上げて、発信していける仕組みができないか。
- ・ ノルディックスキー世界選手権大会は、大通公園を封鎖してクロスカントリースキーのイベントをするくらいのことをやらないと市民にはなかなか認知されない気がする。
- ・ 中心部イベントの際には、単一ではなくスポーツと健康や文化というように、いろいろなものがセッションして新しい何かができることが考えられないか。

杉森委員

- ・ 音楽や演劇を発信する場所への支援を考えられないか。
- ・ 地域の活動の場は、幅広い年齢層の人、多様な人が一緒になって活動できるように工夫する。
- ・ 総合学習の場を、ただ見学してレポートを書く場ではなく、子供たちが自分でプランを立て、ものをつくり、体験する、そういったプロセスを体験する場としたい。
- ・ フリースクールには、勉強だけではなく文化教育面で特色を出しているところがある。そういうところとの連携や委託を考えられないか。

意見交換

<重点戦略課題「芸術・文化の薫る街の実現」について>

中島委員

- ・ 「小さな表現の場所」が一番のポイントだと思う。その場所自体がNPOとして申請しやすいシステムをつくれないうか。
 - ・ 市民に対するNPOの最大の責任は情報公開。それができるのであれば設立申請を簡略化できるシステムが必要。それを市の意見として言えないか。
 - ・ 大多数のものではなく、マイノリティーのものが享受できるというのが文化では非常に重要。
- Q 芸術文化振興助成は、例えばロック音楽をやるとか短編映画をつくることに対する助成は難しいのか。
- A 難しい。(事務局)
- ・ 表現し発信することに対する助成システムが、特に若者のためには必要。そのシステムは、既存の芸術文化振興助成を組み替えればいいのではないか。
 - ・ NPOの活動拠点のモデルケースが必要。それは大通小学校である。

高田委員

- ・ 「街のいたるところで芸術・文化の楽しみを享受し」とあるが、芸術・文化が集客や世界への発信につながるようなことを考えたい。
- ・ 文化発信のための大きなスペース、ステージとして大通公園を利用できないか。

飯塚委員

- ・ 芸術・文化、スポーツにはレベルの高いものと地域、個人での小さな活動の2面があるが、その間をつなげるということを整理して提言に盛り込みたい。
- ・ 資料2の3ページ目「思考力、判断力、表現力などの確かな学力」は「学力」ではなく「能力」。
- ・ 臼井会長が言われた「自分自身が成長するきっかけとしてボランティアを位置付ける」ということをシステム化できないか。

- ・ さまざまな活動の場として、地域に一つずつ、公設民営型でNPO的な運営ができる地域の核になるようなものをつくることはできないか。(中島委員)
- ・ ボランティアをするために有料で講座を受けさせることで、ボランティア意識が高まるということもある。(中島委員)
- ・ 八軒連絡所の中に情報交流センターがあることで、町内会や地域のいろんな人が混ざりあっていい効果になっていると思う。(飯塚委員)
- ・ 新しい建物を建てるのは愚の骨頂。すでにある施設をうまく活用していくことが重要。(中島委員)
- ・ 不登校の子供たちにとっては社会やいろんな人に触れることが重要だが、そのためにはフリースクールやほかのたくさんのものが集まっている場が必要。(杉森委員)
- ・ 何かの機能、例えば印刷機を使うために、地域の人がそこに集まってくるといってもいいのではないか。(飯塚委員)

<市民会議の提言内容について>

- ・ この会議では大きなビジョンを語りたい。拠点の場所や利用時間、助成といったことはビジョンの後の問題だと思う。(高田委員)
- ・ ビジョンは、現状の問題と将来イメージを行きつ戻りつつくっていくものである。(臼井会長)
- ・ この会議ではできないものもできるようにしていくという意識が必要。そういう常識を破ることに私たちの意義がある。(高田委員)

<重点戦略課題「スポーツの魅力あふれる街の実現」について>

- ・ 冬をどう楽しむかという象徴的な考え方をどこかに盛り込んでいくべきではないか。恒常的にできないのであれば、1日だけのイベントということも考えられる。(中島委員)
 - ・ 資料2の2ページ「気軽に楽しめるものへ」をもう少し具体的な言葉にした方がいい。(中島委員)
- Q 「スポーツにおける札幌ブランドを高める」とあるが、コンサドーレのほかに札幌ブランドがあるのではないか。(杉森委員)
- A これはコンサドーレなどのプロスポーツだけということではなく、札幌という思い浮かべるスポーツがあればいいということ。第一にはウインタースポーツだと考えている。(事務局)

<重点戦略課題「自立した市民を育てる教育の推進」「さっぽろを支え、発信する人づくり」について>

- Q 「学校教育における家庭や地域社会の様々な専門家との連携体制の一層充実」の次に「非行やいじめ、不登校に対する取組の推進」とあるが、この2つはセットで、学校が中心となって進めるということか。(杉森委員)

A セットです。(事務局)

- ・ 中教審の中間報告で地域運営学校の創設が提言されたが、こういう形にすれば、いじめの問題にしても非行の問題にしても教師と地域が繋がっていくのではないか。札幌市としては是非やるべきだ。(高田委員)
- ・ これは何年間も言われているが、それでも不登校者の数は変わらない。学校が主体になって変わらなかったものをなぜこのまま続けるのか。不登校の子が民間のフリースクールにたくさん来ている現状が一言も書かれないところに疑問を感じる。(杉森委員)
- ・ 家庭が一番問題だと思っているが、それは個の問題なのでなかなか踏み切れないということもあると思う。(高田委員)
- ・ 推進の主体は、学校と家庭、地域の3つだと思う。推進の主体を明記したほうがいい。(臼井委員)

Q 最近札幌市教育委員会でつくった不登校についての手引書について紹介してほしい。(臼井委員)

A 「生徒指導第12集 不登校への対応」を札幌市の教職員に配った。不登校児への対応の仕方が関係機関との連携を含めて書いてある。(事務局)

Q ここに施策として書かれていることが具体的な文言としてビジョン編に盛り込まれるのか。(飯塚委員)

A 事業を推進していく上での考え方ということで盛り込まれる。(事務局)

Q 「学校教育における家庭や地域社会の様々な専門家との連携体制の一層の充実」をこれからは地域との連携で学校運営がなされていくと解釈したが。(高田委員)

A そういうこともあり得るかもしれないがそれだけではない。(事務局)

- ・ はっきりとそういう形にすべきであると言いたい。先生一人では見きれない部分があると思うが、PTAや地域が関わってくることによって、お互いを理解し合う、啓蒙し合うことにもなる。(高田委員)
- ・ 試験的にそれをやってみて、結果が良ければ広げていくという形にしないとうまくいかないと思う。(高田委員)

- ・ 全体的に言えるが、老人を邪魔者にするのではなく、もっと活躍してもらおうという視点の見直しが必要。(阿部委員)

- ・ 老いることについての見方を考えることも大事な教育の取り組み。保育所や学校の施設を高齢者福祉施設と合築して交流の場をつくるという取り組みの例もある。(臼井委員)

- ・ 「異年齢間の交流機会の減少」「世代間交流」という言葉があるが、狭い範囲ではなく、高齢者も含めた世代間交流を考えてもらいたい。(阿部委員)

Q 「異年齢間の交流」は中高一貫教育のことを含めて書いているのかと思っていたが、そうではないのか。(高田委員)

A どちらかというと学校外のこと。(事務局)

- ・ 地域の中で子供たちとお年寄りが交流できる場を政策的につくる必要がある。(中島委員)

大沼委員

- ・ なぜこの現状と課題から基本方針の1番目が出てくるのかが分からない。
- ・ 学校が法規で身動きがとれない状態だということは分かる。「札幌市はこういった方針でいきたい」ということを考えたい。

- ・ 市立高等専門学校の卒業生は市立大学設置について良い意見、ユニークな意見を言えるのではないかと。（高田委員）
- ・ 市立大学にはぜひアイヌ文化学科を。（中島委員）
- ・ 文化とか人づくりは経済指標で計ればおそらくマイナス。それを評価する評価基準を打ち出したい。（大沼委員）
- ・ 文化が経済指標としてマイナスになるとは限らない。（臼井会長）
- ・ プラスにするにはかなり長いスパンで見ないといけない。（大沼委員）
- ・ 3年で元を取れるようなことにはならない。（中島委員）
- ・ 例えばPMFは10年以上の期間があって今のものがある。場を提供することで少しずつ広がりが出てくるということ。時間もかかるが経済効果も大きいと思うので必ずしもマイナスではない。（高田委員）
- ・ 芸術・文化の経済効果は大変大きいと思う。主に美術の世界ではアーティスト・イン・レジデンス（海外の芸術家を一定期間地域に招いて、実際に現地で創作活動を行ってもらう制度）ということが言われる。北海道なり札幌が発展していくには、いろいろなもの、人と直接触れ合うことが大事。また、札幌への滞在、観光面のホスピタリティを高めることにもなる。そういったことを盛り込みたい。（飯塚委員）

Q 4ページにある「司法教育」とは何か。（阿部委員）

A 国で裁判員制度が導入されると一般の国民が裁判員として裁判に関わることになるが、そのときに基礎的なことをここで理解してもらおう。これから考えていかなければならない施策として掲げている。（事務局）

- ・ 以前創成小学校であった成人学校をもう一度できないか。そこでは何かをつくるプロセスを体験することを考えたい。それが大通小学校の跡地になればいい。（中島委員）